

レジャー・アセスメントと施策構築に関する基礎的研究（2）

- 流山市民調査によるレジャー志向とその実態の検討 -

○土屋 薫（江戸川大学）、佐橋由美（大阪樟蔭女子大学）、佐藤馨（びわこ成蹊スポーツ大学）

キーワード：余暇診断、レジャー診断ツール、レジャー志向性尺度

1. はじめに

本研究は昨年引き続き、レジャー行動を発達モデルとしてとらえて余暇診断の際の枠組みとして利用することを想定した「レジャー志向性尺度」（佐橋・佐藤 2007a）に着目し、その尺度としての妥当性を一般サンプルで検証することを目的としている。

昨年度報告したとおり、レジャー志向性尺度は、学生サンプルによる先行研究と同様（佐橋・佐藤 2007a）、6つの因子構造が確認され、因子ごとの信頼性係数を見ても下位尺度の内的一貫性がある程度高いものとしてとらえることができる。ただ、寄与率の点から見たとき、各因子の順位に関して先行研究と異なる点が出た。それがサンプル特性に依存するものなのかどうかについては今後他の調査研究の成果を待つ必要があるが、本研究では、このレジャー志向性尺度によるセグメンテーションと余暇診断場面での活用に関して検討するものとする。

なお用語に関して、本研究においては、余暇とレジャーを同義のものとして捉え、統一的に「レジャー」という語を用いるが、用法が一般化している名称等については、「余暇」という語を用いる。

2. 研究の方法

本研究は、平成20年度江戸川大学学内共同研究費にて実施した市民意識調査（千葉県流山市）の質問紙の一部に組み込んだレジャー志向性尺度（一部改定版）の集計結果を用いた。

（1）サンプル

調査対象者のサンプリングには層化二段無作為抽出法を用いた。手順としては、流山市を自然条件・社会条件に沿って4地域に分け（北部・中部・南部・東部）、調査区域の選挙人名簿を用いて地域区分ごとに人口に比例して一定数のサンプルを抽出した（計1602）。

（2）手続き

2008年4月15日～30日に郵送法による質問紙調査として実施した。

（3）質問紙の構成

質問紙全体は、a) 流山市について、b) レジャー行動（レジャー志向性）、c) メディア接触、d) 携帯電話の利用状況、e) パソコンインターネットの利用状況、f) 対人関係について（社交性、自己効力感）、g) 属性、で構成した。

（4）分析

志向性尺度の反応結果に対して因子分析を行ない尺度の構造を明らかにし、先行研究の結果と比較した。

3. 結果と考察

（1）サンプル属性

回収率は39.1%だったが、回答者の約40%が男性、約60%が女性で、50歳代・60歳代を合わせると50%弱、ついで30歳代・40歳代を合わせた20%、70歳代の15%となっている。職業では、主婦（家事専業）とつとめ人がそれぞれ25%前後、ついでパートタイム・アルバイトと無職がそれぞれ15%という割合だった。

同居家族員数は平均3.07人（SD=1.44）で、2世代で構成される家族が44.4%を占め、続いて約30%が夫婦のみの二人暮らしであった。

また、80&近くの回答者が持ち家一戸建てに暮らしており、ついで分譲集合住宅が12.4%となっている。さらに居住年数に関しては、20年以上の割合が最も高く60%を超えていた。しかし、出身に関しては流山市以外が占める割合が80%を超えていた。

表1 年齢

	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	80歳以上
%	8.4	13.1	10.8	22.3	25.3	15.7	4.4
実数	42	65	54	111	126	78	22

表2 職業

	農業	自営業	つとめ人	パートアルバイト	公務員	主婦 家事労働	学生	無職	その他	無回答
%	1.2	7.4	24.5	14.7	1.8	25.7	2.2	16.7	5.6	2
実数	6	37	122	73	9	128	11	83	28	1

表3 同居家族員数

	1人	2人	3人	4人	5人	6人	7人	8人	無回答
%	11.8	27.5	26.9	17.9	9.2	4.4	1.4	.6	2
実数	59	137	134	89	46	22	7	3	1

表4 家族構成

	一人暮らし	夫婦のみ	親と子ども	三世大家族	きょうだいのみ	その他	無回答
%	6.4	29.1	44.4	9.6	4	9.4	.6
実数	32	145	221	48	2	47	3

表5 住まい

	持ち家一戸建て	賃貸一戸建て	分譲集合住宅	民間賃貸集合住宅	公営賃貸集合住宅	社宅・官舎	寮
%	77.5	2.2	12.4	6.2	.6	1.0	1.0
実数	386	11	62	31	3	5	

表6 流山市への居住年数

	1年未満	1～3年未満	3～5年未満	5～10年未満	10～20年未満	20年以上
%	1.2	4.6	2.8	10.8	17.1	63.5
実数	6	23	14	54	85	316

(2) 休日の行動範囲

東葛エリア内（ここでは野田市・柏市・流山市・松戸市の隣接4市）の施設利用が9割、柏市・流山市の施設利用が6割を超えており、休日に関して、流山市民はそれほど行動半径が広くないと言える。また、モール・商業施設の利用が過半数を占めており、休日の行動特性が消費行動を背景としていることは明らかである。もちろん、レジャー・スポーツ施設の利用や公園緑地の利用といった時間消費型の余暇活動もある程度の割合を占めており、バランスのとれた自由時間の過ごし方を実践する下地を有している。

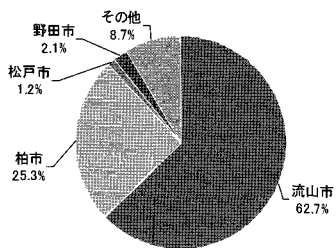


図1 もっともよく行く休日施設の場所

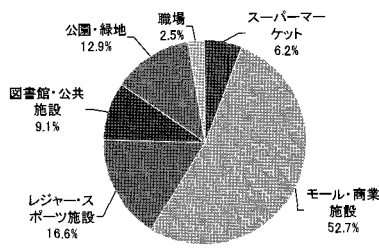


図2 もっともよく行く休日施設

(3) レジャー志向性尺度

先に述べたとおり、尺度自体の有効性は確認されており、詳細については昨年度の報告に譲る（土屋薫・茅野宏明・マーレー寛子・佐橋由美・佐藤馨 2008、表7参照）。

(4) レジャー志向性パターンの抽出と検討

ここでは、先行研究（佐橋・佐藤 2007a）と同様の処理をして志向性のパターンを検討した。具体的には因子分析から導き出された「対人関係志向」「主導性」「利他主義」「活動性」「自然志向」「長期的展望・向上」という6つの因子の因子得点を用いて、階層クラスター分析（Ward法）を行なった。ここから抽出された5つのクラスターの因子得点をパターン化して図示したのが図4である。

表7 レジャー志向性尺度の基本統計量と因子分析の結果

旧 番号	新 番号	質問内容(+)	平均	SD	対人関係 志向	主導性	利他主義	活動性	自然志向	長期的 展望・向上	α
*12	*10	A 誰かと一緒に過ごす	2.27	.789	.741	.124	.134	.048	-.153	.028	.752
4	4	B 友達と過ごしたい	2.43	.827	.575	.045	.096	.085	-.090	-.006	
20	17	B 友人や家族とおしゃべりをしている	2.43	.836	.540	.067	-.086	-.026	-.181	.054	.752
2	2	B 出かけたがる	2.71	.849	.905	.110	-.080	.265	.036	.018	
*18	*15	A ドライブや旅行に出かけるのが楽しい	3.06	.806	.473	.151	-.001	.200	.244	-.017	.752
*28	*23	A 私の趣味活動は他の人と一緒にするものが多い	2.34	.866	.459	.126	.169	.183	-.131	-.030	
*23	*19	A 最初に計画を提案するのはたいして自分だ	2.35	.752	.116	.802	.054	.116	.040	-.013	.775
31	25	B 何を計画するとき、たいして自分が中心になって進めるのだ	2.25	.716	.120	.708	.137	.026	-.007	.093	
*15	*12	A 自分が中心になって計画するほうが楽しい、好きな人が集まる場面では自分の中心	2.58	.756	.198	.628	.087	.067	.087	.233	.752
*7	*7	A 自由時間にはできるだけ社会や人の役に立ちたい人の役に立つことは喜びなので自由時間にはそのような活動を行う	2.10	.769	.325	.441	.100	.086	-.043	.055	
*24	*20	A 自由時間にはできるだけ社会や人の役に立ちたい人の役に立つことは喜びなので自由時間にはそのような活動を行う	2.31	.781	.021	.153	.719	.193	-.003	.110	.771
*8	*8	A 積極的にボランティア活動や社会貢献に関わってみたい	2.00	.760	-.025	.079	.549	.124	-.078	.097	
32	26	B ボランティア活動やNPO活動など、時間があつたらしてみたい	2.34	.667	.109	.079	.617	.015	.058	.151	.752
16	13	B ボランティア活動やNPO活動など、時間があつたらしてみたい	2.56	.824	.113	.013	.585	.185	.131	.250	
*25	*21	A 体を活発に動かさずほうがリフレッシュ(エネルギー充電)になる	2.61	.836	.237	.224	.182	.687	-.069	.004	.827
*1	*1	A 体を動かしたい	2.80	.852	.264	.099	.085	.644	.063	.159	
*17	*14	A スポーツ、フィットネスに力を入れている	2.31	.914	.257	.174	.126	.562	-.020	.023	.752
-	28	B 自然は遊び場だ	1.82	.771	.045	.056	-.090	-.197	-.117	.002	
*11	*9	A 自然の中にいると落ち着く人のいない静かな場所に行きたい	3.34	.682	-.122	.013	.046	-.009	.639	-.106	.623
*27	*22	A 自然の中でのスローライフにあこがれる	3.00	.722	-.235	.012	-.049	-.052	.503	-.019	
*3	3	B 旅行するなら自然豊かなところ	3.48	.654	.010	-.066	-.006	.114	.597	.013	.752
19	16	B 自然の中でのスローライフにあこがれる	3.12	.706	.037	.135	.050	.046	.341	.120	
*21	18	B 今は知識や技能がなくても努力すればできるように思う	2.24	.791	.040	.127	.096	.021	-.010	.637	.579
29	24	B 将来の自分にとって種となる活動を趣味として行う資格取得や技術向上を意識しながら趣味活動をする	2.54	.746	-.011	.087	.175	-.019	.035	.508	
*14	*11	A 時間かできれば何が学びたい	1.98	.810	.183	.055	.134	.017	-.190	.425	.752
5	5	B 挑戦的で奥深い活動が好き	2.50	.858	-.228	-.038	.234	.213	.130	.425	
6	6	B 真の暑い日は木陰で涼みたい	2.12	.778	-.079	.313	-.042	.070	.027	.333	.752
-	27	B 真の暑い日は木陰で涼みたい	2.59	.954	.031	-.042	.135	.205	.153	.208	
					二重和	2.55	2.01	1.97	1.62	1.52	1.42
					寄与率(%)	9.09	7.45	7.05	5.78	5.43	5.70
					累積(%)	9.09	16.54	23.59	29.37	34.80	39.87

*1 旧番号は先行研究(佐橋・佐藤 2007a)における項目番号を指す。新番号は本調査における項目番号を指す。
 *2 因子名は先行研究(佐橋・佐藤 2007a)による。
 *3 得点化はA→Bの順に1→4点を記点した。項目番号に「」が付されている場合はA→Bの順に4→1点を与えた。
 *4 因子分析は主因子法による因子抽出の後、バリマックス法による回転を実行した。

特徴的なものから見ると、第3クラスター (Clu3) は各因子の得点が低いことから「消極型」、各因子の得点がある程度バランスよく出ている第1クラスター (Clu1) は「最適型」として捉えることができる。また6つの因子のうち「長期的展望・向上」と「利他主義」の得点が突出して高く、それに比べて「対人関係志向」の得点が極端に低い第5クラスター (Clu5) は先行研究に倣って「自己啓発型」と位置づけることができるだろう。また、「主導性」の得点が高く「対人関係志向」と「利他主義」の得点の低い第4クラスター (Clu4) は「自己中心型」と言える。ただし、先行研究では「標準型」と名づけられ、すべての因子得点が平均 (=0) に近いパターンは、今回の調査では現われなかった。

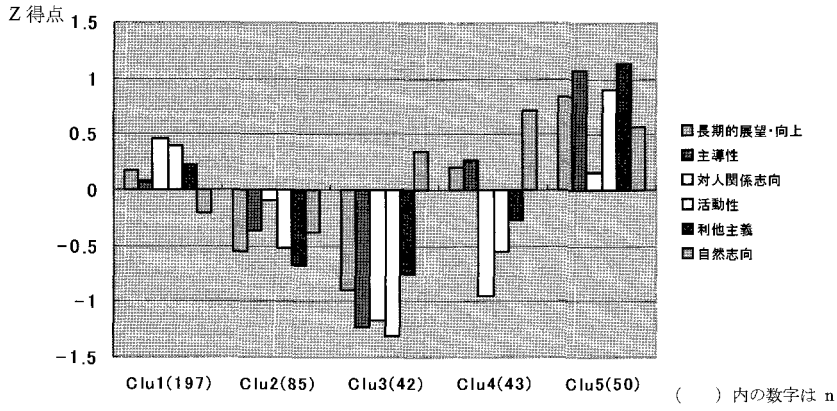


図4 各クラスターの志向性得点パターン

4. まとめ

今回の調査によって、「平準型」と呼ばれるパターンを除けば、一般のサンプルでもレジャー志向性尺度によってレジャーに関する「到達度」のセグメンテーションがある程度可能であることがわかった。

ただ、レジャー志向性尺度のレジャー生活診断ツールとしての有効性を検証するためには、レジャー活動やクオリティ・オブ・ライフ、生活満足度といった関連変数を組み込んだモデルとしての検討が望まれる。また、先行研究との比較からもわかるとおり（図5）、2サンプルの差異をサンプル特性に基づくものと見るか、尺度の脆弱性に起因するものと見るか、明らかにするためには、異なるサンプルによる検証も合わせて行なっていくことが求められるであろう。

そしてそのプロセスを積み重ねることが施策構築につながることは言うまでもない。

5. 参考文献

佐橋由美、「最適な」レジャースタイルを特徴づける中核要素としての志向性概念の検討、大阪樟蔭女子大学学術研究会人間科学研究紀要第8号：25-37、2009

佐橋由美・佐藤馨、レジャー志向性尺度の開発に関する研究（2）-多様な大学生における調査データから志向性尺度の今後を展望する-、レジャー・レクリエーション研究 59：52-55、2007a

佐橋由美・佐藤馨、スポーツ活動参加促進に向けた予備的研究 -余暇志向性尺度の開発と志向性がスポーツ参加に繋がる可能性の検討-、びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要第5号：173-185、2007b

土屋薫・茅野宏明・マーレー寛子・佐橋由美・佐藤馨、レジャー・アセスメントと施策構築に関する基礎的研究、レジャー・レクリエーション研究 61：90-93、2008

土屋薫、レジャー志向性尺度に見られる流山市の特徴、情報と社会第19号：317-322、2009

土屋薫・木村文香・林香織、学際的アプローチによる地域研究 -流山コミュニティモデルの構築と大学の役割-、江戸川大学学内共同研究報告書：1-9、2009

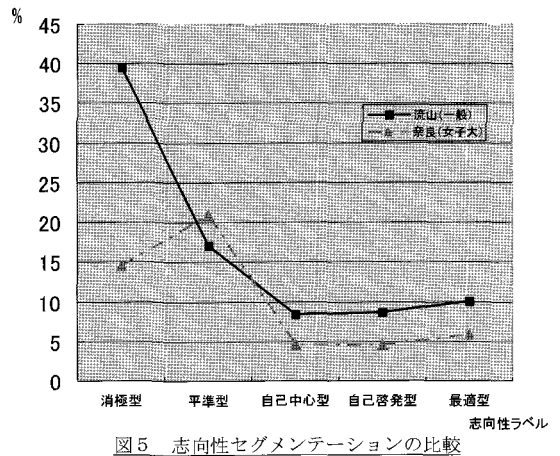


図5 志向性セグメンテーションの比較